

## 日本小児感染症学会若手会員研修会第1回水戸偕楽園セミナー

## 概 要

田 中 敏 博\*

## はじめに

幅広い年齢、発達段階、疾患を扱う小児科診療においても、高度な専門性が求められる昨今の状況から、日本小児科学会の各分科会の活動が活発化している。その一端として、年1回の学術集会とは別に、セミナーや研修会を企画、運営している分科会は少なくない。なかには、専門領域を同じくする仲間が集まって泊り込みで語り明かすようなスタイルが研究会、学会へと発展したような例もあって、その名残を後に伝える目的からセミナーや研修会が長年継続されている分科会もある。一方で、年1回、2~3日間の学術集会のなかでは伝えきれない知識・経験の伝授と、果たし得ない交流を図る目的で、それらが行われている場合もある。

会員数が2,500名を超える規模になった日本小児感染症学会でも、研究教育委員会を中心に若手会員を主たる対象としたセミナー/研修会の立ち上げについてここ数年にわたって議論がなされてきたが、2010年9月に第1回目を開催することができた。この概要を報告する。

## I. 開催決定までの経緯

委員会内では以前よりその必要性が折に触れて話題には上っていたが、2008年度より、開催時期や場所、内容や形式などの具体案が検討された。2009年の第41回の総会・学術集會中に開催された委員会において、開催に向けて一歩を踏み出すことで合意がなされた。まず第1回を開催して、

それをたたき台にして前進を、ということで、筆者が責任者に任命された。

それ以後、2010年の春先まで断続的に続けられた委員間でのE-mailを用いた議論のなかから、セミナー/研修会を、小児感染症学を体系的に学べる機会を提供する場としての位置づけと並行して、受講生どうしの交流、および受講生と講師陣の世代を超えた交流を図れる場となるようにというイメージも形成されていった。それを念頭に置いて計画を練り上げていった。

## 1. 日 程

1泊2日あるいは2泊3日が現実的な候補として検討された。できる限り経費を抑制することが課題であったこともあり、今回は1泊2日にする事とした。平日開催と週末開催については、受講生と講師陣の双方の参加しやすさを重視して、特に異論なく後者が採用された。

## 2. 開催時期

①秋の学会シーズンと、インフルエンザなどの感染症の流行シーズンを避ける。

②夏休み、冬休みなど、休暇をとりやすい時期とする。

③委員会のメンバーが講師として最大限に参加できること。

2010年5月の時点で①~③を考慮し、9月4(土)、5日(日)の2日間に開催することを決定した。

## 3. 開催場所・施設

①交通の便がよいこと。

②昼の部とともに夜の部(懇親会)の実施がス

\* JA 静岡厚生連静岡厚生病院小児科/日本小児感染症学会研究教育委員会

ムーズであること。

③ 会場費および宿泊費を抑制できること。

①～③を勘案し、責任者の田中の前勤務地であった水戸のユースホテルが候補にあげられた。水戸は、上野から特急電車で約1時間の距離でありながら全国規模の学会や研究会が開催されることはまれであり、ぜひこの機会に皆さんに訪れてほしいということ、そしてそのことが全国で最低水準にある茨城県の小児科医数のでこ入れの一助になれば、との思いから、筆者が強く推薦したという経緯である。施設は5月に実際に下見をし、担当の方々のお話をうかがって、理念に沿った計画を実現できるものと判断して最終決定した。

開催の方法として、開催地や施設を固定することも一案である。これについては第1回の開催後に、受講生のアンケート調査の結果も踏まえて再検討することとした。

#### 4. 形式・内容

講義形式、症例検討形式、グループディスカッション形式など、色々な案があがった。準備期間が限られていることもあり、今回は講義形式を中心として、症例検討の要素を一部織り込む方針とした。

研究教育委員会のメンバーが講師を務め、トピックのバランスをみて特別講師を依頼することにした。

#### 5. 企業の支援

企業の協賛を受ける場合のメリット、デメリットについて議論された。メリットは、費用面と運営にかかわる人手の面で、企業の応援が得られる点が最も大きな要素と考えられた。デメリットは、支援企業の意向を完全には無視できない状況にもなり得ると考えられることであった。

デメリットの部分に関しては、依頼する企業を毎年変えていくことでクリアできる可能性はあると考えられた。しかしながら、検討の過程で学会本体から若干の費用補助をいただける見通しもつき、人手の部分での課題は残るものの、まず今回は企業の力を借りずに進めていくことで意見がまとまった。

#### 6. 参加費

若手を主たる対象とした場合、1泊2日で、受講料、宿泊費を含めて2～3万円が妥当なところであろうという意見が大勢であった。大学院生や研修医については若干のディスカウントも検討する余地を残した。

## II. 開催までの経過・準備

### 1. アナウンス

第1回のセミナー開催の情報を広め、参加者を募るために、まずは7月初旬にあった学会誌の発送の際に、学会事務局に募集要項を同封してもらう一方、7月半ばに学会ホームページに情報を掲載した。並行して、小児科や感染症関連のメーリングリストへの情報の提供を積極的に行った。限られた期間ではあったが、情報の周知に努めた。

### 2. プログラムの作成

講義形式を基本とし、当学会の扱うテーマを細菌、ウイルス、免疫に大別して、それぞれについて1～2コマの講義が設けられるように準備した。実質的に講義を開始できるのは第1日目の午後で、地方からの参加者の帰路を考えると第2日目の昼過ぎには終了する必要がある。そこで、全体の時間と、過密な日程のなかでの受講生の集中力の持続を勘案して、1コマを約50分間とし、休憩時間も余裕をもって設けることにした。

研究教育委員会外からの特別講師として、若手代表で長野の笠井正志先生と、地元代表（筑波大学 須磨崎教授のご推薦）で筑波大学小児科の工藤豊一郎先生をお招きした。

### 3. 上原すゝ子先生の特別参加

募集要項を学会誌の郵送に乗じて行ったところ、水戸がご出身であるとのことで、上原先生より直々にご協力のお申し出をいただいた。運営する側としては願ってもないお話であり、小児感染症学の大先輩としての若手に向けてのメッセージ的なご講演をということで、プログラムに取り込ませていただいた。

セミナー当日には、上原先生のお取り計らいと協和企画のご厚意により、「小児呼吸器感染症診療ガイドライン2007」が受講生全員に配布されることになったことを付記する。



図 1 講義風景

#### 4. 応募状況

アナウンスを開始してから順調に申し込みはあったが、締め切り（当初は7月16日）までの期間が短く、予定していた25名に若干名足りない状況であった。このため、期限を7月末までに延長し、その旨をホームページに再度掲載した。延長した期限までに35名の応募があった。講義室および宿泊室には全員を受け入れる余裕があったため、35名全員に受講承諾の通知をE-mailで行った。

#### 5. 参加費の決定

募集をした時点では2万円、研修医や大学院生は若干のディスカウントをする旨、要項に記載した。しかし、受講生が予定の25名より増員されたこと、および研修医や大学院生の定義づけ、線引きが容易ではないことなどから、一律に1万5,000円とすることで最終決定した。

#### 6. 抄録集の作製

セミナーの日程、参加者リスト、各講義の要旨やスライドをまとめた抄録集を作製、当日に配布できるように印刷をし、クリップでとめるだけの簡単な代物ではあったが用意をした。

### III. 開催当日

#### 1. 受講生の参加状況

35名あった応募者のうち、1名は開催前に辞退の申し出があった。残りの34名から参加費の入金があった。

初日に3名の遅刻者があった。また、1名が両日とも欠席であった。したがって最終的な参加者



図 2 第1日目、堤先生の講義終了後に



図 3 第2日目、朝食前に偕楽園を早朝散歩して、千波湖（左側）をバックに記念撮影

は33名となった。

#### 2. 使用施設

第1日目の講義と宿泊は、偕楽園ユースホテルを利用した。両日とも同じ場所を利用する予定であったが、開場時間の都合から、第2日目の講義は隣接する茨城県立歴史館の講堂で行った。

#### 3. セミナー

実際の講義の一覧は日程表の通りである。講義によっては時間延長されたものもあったが、休憩の部分で時間調整をしながら日程を消化していった。各講義の最後に質疑応答の時間を設けたが、積極的に質問する受講生の姿が目立った。

#### 4. 懇親会

夕食後の2コマの症例検討会形式の講義の後、入浴時間を挟んで懇親会に入った。受講生どうし、および受講生と講師が和室で膝を付き合わせてさまざまな話題で盛り上がる約3時間となった。ユースホテルという性格上、消灯時間が定められていたこととアルコールの持ち込みに関して自

制を促されていた点がやや残念ではあったが、翌日のことも考慮すると適当な時間で切り上がったかたちと思われる。

#### 5. 運営補助

会場の設営、受付、資料配布、弁当配布、懇親会準備、片付け、その他で、初日5名、2日目4名の補助員を確保した。内訳は、責任者の前住地、日製ひたちなか総合病院の感染対策ナース1名、薬剤師5名、責任者の現在の勤務地、静岡厚生病院の感染対策ナース1名である。セミナーの円滑な運営が果たせたのは、彼らの力によるところが大であった。

### IV. 収 支

1人1万5,000円の参加費で34名から入金が入金済まされていたことより、収入は51万円。施設利用料、宿泊代、食事代、事務連絡費、その他を支出し、約15万円の余剰金が見込まれる(2010年11月末現在)。講師の交通費については学会本体から補助を受けた。

### V. アンケート結果

各講義、およびセミナー自体について、受講生全員を対象にアンケートを行っている。講義についてのアンケート結果は、各講師にフィードバックされる予定である。

講義に関しては、概ね高い満足度、有用性を感じてもらえたようであった。またセミナー自体について、開催時期や日程については良好な満足度であったようであるが、開催場所、開催施設には若干以上の不満の声が聞かれた。

### VI. 問 題 点

1. 応募資格は会員もしくは入会予定の者としたが、セミナー終了後も2名が手続きを終えておらず、1名が引き続き催促を続けざるを得ない状況となっている(2010年11月末現在)。この点については、事前の対処法に検討の余地があると思われる。

2. 事前準備に際し、学会事務局のお力添えをいただいた。しかしながら、もっと早い段階から

連携できれば、無駄な時間や経費がさらに省ける印象である。具体的には、申し込みにかかる事務手続き、お金の扱いにかかる部分などである。

3. 茨城県水戸市での開催ということで、地元の筑波大学小児科 須磨崎教授と連絡をとり、講師派遣というかたちでご協力をいただいた。しかし、水戸市や茨城県の医師会や小児科医会とのコミュニケーションが十分でなかったことは反省点である。開催地におけるこうした連絡や広報の不徹底が、茨城県からの受講生がゼロに終わるという大変残念な状況にもつながった可能性がある。

### おわりに

準備期間および準備そのものの不足から、問題点も多々あったであろうと思われるが、受講生の熱意と、講師としてご参加いただいた先生方、当日の運営補助にあたってくださった皆様のご協力により、予定した日程を無事に終えることができた。また、とにもかくにも第1回目を開催したことにより、具体的な議論の材料を手にすることができたわけで、第2回目以降がより充実していくことが期待される。

受講生の皆さんが今回のセミナーから何かを学びとり、感じとり、さらには志を同じくする者どうしの将来につながる結びつきを芽生えさせてくれたとしたら、研究教育委員会として、また本セミナーの責任者として、望外の喜びである。

謝辞：本セミナーを開催するにあたり、多大なご協力をいただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

日立製作所ひたちなか総合病院

薬剤師 小川和奈さん、友常文子さん、佐藤和人さん、猪瀬祐亮さん、海老沢美幸さん

看護師 根本広子さん

JA 静岡厚生連静岡厚生病院

看護師 佐藤綾乃さん

医事課 竹内智子さん

株式会社協和企画